

原田直次郎「騎龍観音」(1890)における「帝国日本」の寓意  
—バヴァリアから護国寺へ—

首都大学東京 長田 謙一

原田直次郎の「騎龍観音」は、ミュンヘン留学の成果を傾注して描かれた、原田の代表作である。本発表は、観音図である本作品が、同時に、憲法と国会を備えて確立される「帝国日本」の寓意でもあることを、関連新知見を加えながら、示そうとするものである。

先行諸研究によってその図像解明が次第に進み、その図像的典拠とも擬しうる作品として鶴洲麗鬻「普門品三十三身図屏風」中の騎龍楊柳観音図(護国寺蔵)も示されるに至っている。しかしこの護国寺屏風を超えるいくつかの細部が解釈の端緒を提供する。まず、観音の手にする水瓶に結ばれた、特別重要な時に臨んで施される紅白の綵帛である。次に、神武歴「2550」の制作年記である。原田の現存作中神武歴を用いたのは、本図含む第三回内国勸業博覧会出品二点のみと管見されることから、少なくとも原田にとってこの年記には特別な意味が託されていたと考えられる。同年は、帝国憲法が前年の公布を受けて施行され帝国議会も開設される、まさに「大日本帝国」確立の年であった。第三は、油彩画が可能とする〈光〉の表現である。観音の額の透明な玉は輝き、観音はアマテラスでもある〈光〉を体現する。第四は、アルトドルファー「アレクサンダー大王の合戦」を想起させる雲間の陽光と壮大な空間表現である。これらは、本図がまさに1890(明治23)年の「帝国日本」の出現を表す寓意であることを示していると考えられよう。

原田のこの寓意表現は、ミュンヘン美術アカデミー校舎ファサードのミネルヴァ、市内二つのバヴァリア、ミュンヘン駅騎龍ミネルヴァ=バヴァリア壁画などによる、ミュンヘンにおける国民国家寓意擬人像体験や関連する図像経験にも依拠していると考えられる。

「騎龍観音」が護国寺に奉納された事実もまた、上の議論を補強する。護国寺の属す真言宗豊山派の総本山長谷寺が古来、観音とアマテラスの習合を示し、護国寺自体も今宮五社を包含していただけでなく、明治期の護国寺は、一部寺域を豊島岡陵に割いて、神仏が新たに接合する極めて特殊な場となっていたからである。関連して、長州閥に通じ太政大臣、内大臣をつとめた公家三条実美が注目される。三条は1891年2月に護国寺に国葬された。さらに父原田一道も注目される。護国寺には一道の属する陸軍の墓地も作られており、原田は父を介して護国寺と三条を同時に意識しうる位置に早くからいた。宮本久宣の指摘する、長州閥への原田の接近は、三条をも意識したものと解されてよからう。

国葬の翌月、三条実美らの肖像画が東京美術学校に委嘱された。原田の「騎龍観音」護国寺搬入はその一月余り後かと考えられる。三条の肖像画は、1893年、美術学校教員ではなくなぜか油画家原田が担当し、1898年に完成する。それは、原田直次郎が「帝国日本」の寓意としての「騎龍観音」に託した望みが辛うじて残しえた実りだったのかもしれない。